



連載第 77 回——対談編(3)

マイペース酪農の実践を振り返り
「農業と食のあり方」を考える (前編)

草・牛・人間の循環を基本に、牛を放牧し、適正規模の経営によって暮らしにゆとりを生みだしてきた「マイペース酪農」。その歩みは、規模拡大が進み輸入穀物への依存からなかなか脱却できない北海道酪農に一筋の希望を与えてくれる。「対談シリーズ」の3人目は、マイペース酪農を実践する人たちの拠り所になっている中標津町の三友盛行さん。チーズ工房も併設している牧場で、これまでの取りくみや穀物多給の問題点、酪農と食文化のあり方などを語り合った。

事をやられていたんですか。
三友 先祖は江戸期までは刀鍛冶で、その流れから刃物鍛冶をやっていましたね。
滝川 高校を卒業して農業を志すわけですが、ここに新規就農する前に無銭旅行で全国を見て歩いたとか
三友 東京の人間だから農業には縁がなくてね。でも、「都会の人間でも農業を志すことは可能だよ」という話を聞き、「そうか、できるのか」と。母方の実家が埼玉県で農業をやっていた、休みのたびに「行ってみたい」と思うようになりました。そのため、大学の農学部を出なければいけないんじゃないか——とも考えたんですが、どうも自分の肌合わない。だったら、進学しないでやる。ひいては日本中の農家を見て歩こうか、となった。

「1haに親牛1頭」の適正規模に 草で育てて天然のミルクづくり

無銭旅行で全国を見て歩き
実習が縁で中標津に入植へ

滝川 この対談シリーズでは、「農と食」に関わる人たちの取りくみや課題を紹介してもらいながら、食料自給や地産地消、環境保全型農業のあり方などについて語り合っています。三友さんは現役の酪農家であり、

かつて中標津農協の組合長を務められた。道内外の生産現場をよく歩いており、道庁や農水省関係者との意見交換を重ねた経験があり、農業政策にも影響を与えてきました。
今回は酪農の歩みから始めて、次の世代につながるような話をしていきたい。訪れる前に、ご著書の「マイペース酪農」(農文協)にあらため

て目を通してみました。出版から十年ほどになりますが、冒頭で、「二十世紀には人口、食料、環境などの課題があつて、すべてに農業が関係している」と書かれています。今日は、食料や環境につながる話ができれば、と思つています。
三友さんは浅草生まれの江戸っ子でしたよね。お父さんは、どんな仕

て目を通してみました。出版から十年ほどになりますが、冒頭で、「二十世紀には人口、食料、環境などの課題があつて、すべてに農業が関係している」と書かれています。今日は、食料や環境につながる話ができれば、と思つています。
三友さんは浅草生まれの江戸っ子でしたよね。お父さんは、どんな仕



中標津の酪農家
三友 盛行さん

ルポライター
滝川 康治

…というものでした。

滝川 みんな、そうした風景に憧れて北海道にやってきますよね。
三友 「いつか北海道で酪農を」がスタート地点にあつたんですが、それは旅の一番最後に取つておいた。

滝川 つまり、最後に訪れたのが北海道だった、と。
三友 別海村(現・別海町)のパイロットファームだったんです。

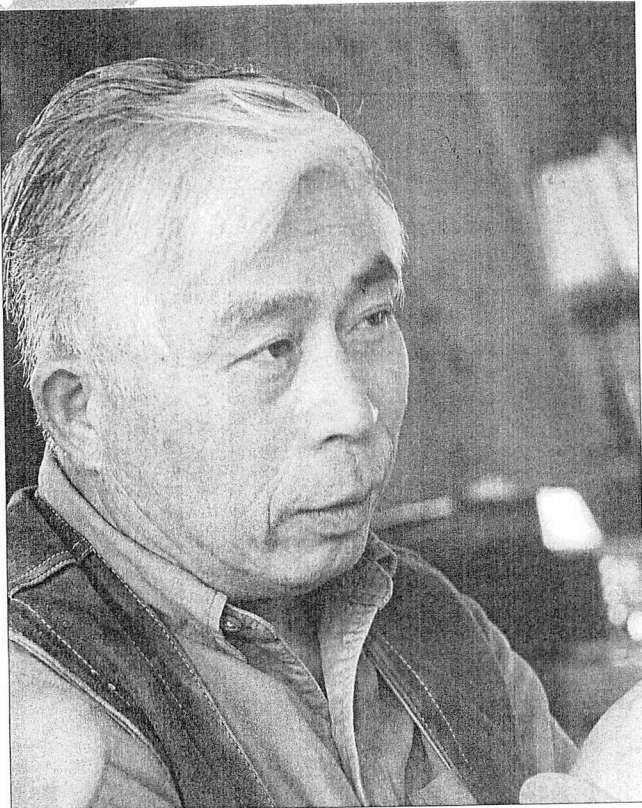
滝川 すると床丹のあたりですか
三友 そう、農家に押しかけ実習をした。電気も水道もなくて、すべてが手作業でね。朝は朝星、夜は夜星で、みんなよく働きました。あのころは面白かったですよ。
滝川 僕らの少年時代で、まだ機械化されていないときですよ。
三友 全国から開拓が集まっていた、みんな将来に対する夢がありまして。「北海道で開拓したいなあ」と思つて実習していたら、「中標津で開拓地を募集しているよ」という話があった。中標津にいくと、「分かった。(入植)の条件は妻帯と携行資金だ」となったわけですよ。

「1haに1頭」の酪農を選択 規模拡大せずに立ち止まる

滝川 そんな二年間の実習を経て、一九六八年にここへ入植された。奥さんを口説いて連れてきたとか。
三友 そうですね。

滝川 この開拓者もそうだとは思いますが、三友さんにとつて、入植から十年間ほどが農業の規模を拡大する時期だったわけですか。
三友 機械開墾だったんですが、ここは原野でしたからね。

滝川 一戸にどれくらい面積が割り当てられたんですか。
三友 基本として四十ヘクタール、



三友 盛行(みとも・もりゆき)
1945年、東京都台東区生まれ。都立高校を卒業後、酪農実習などをへて、68年に根室管内中標津町依橋へ開拓入植。「1haに親牛1頭」を基本に一貫して循環型酪農を営む。97年には牧場内にチーズ工房を設立し、妻の由美子さん(45年、東京都生まれ)が切り盛り。60haの土地(うち草地は50ha)で55頭の乳牛(経産牛は35頭)を飼養し、年間生産乳量は約170トン。牧場の目標は「無肥料・不耕起・無殺菌」で1haに1頭の親牛を飼うこと。93年から6年間、中標津町農協組合長。著書に『マイペース酪農』(2000年、農文協)

三友 しゃべる人がいて、みんなが聞くことを重ねてきた。もう一つは、「夫婦で参加」が基本です。交流会を続けていくと、まず男の人が牛の調子や草が上手に採れたとか、ちよつと話をしようになる。子育て中の人がたくさんいましたから、子どもものも含めて話す。そのうち女の人が発言するようになったんですよ(笑)。たくさん感じているものがあつたわけです。夫婦で参加しても意見が違ふんだよね。男はどうしても格好のいい話をするわけところが、「牛の調子が上手くいっている」と言っても、「父さん、それ違ふよね」となる(笑)。
滝川 男のロマン、女のなんとか

マイペースだ。勉強会に来てくれ」という話になった(笑)。
滝川 「マイペース酪農」を僕が初めて取材したのは、「北方ジャーナル」の連載で農業と食の現場レポートを二年ほど続けたときです。
三友 そうでしたね。
滝川 それが九三年の秋なんです。

三友さんや別海の酪農学習会のこと。は当時、農業や行政の関係者には知られていましたが、一般誌で取り上げたのは僕が最初でしょうね。酪農家出身なので身近に感じたこともある。仕事を終え、皆さん夜遅くまで熱心に語り合う姿が印象に残っています。「マイペース酪農交流会」につ

いて少し説明してもらえませんか。
三友 先ほどの経過をたどり(90年代初めに二年連続で学習会で話をしたら、「三友さんの実践をもう少し勉強してみたい」ということになった。農家は仕事を持っているし、通知して集まるのは難しいので、「毎月第三水曜日に集まり、定例の交

流会を始めよう」という話になった。今と違ふ場所が決まっていた、そこに行く仲間がいる、と。
滝川 僕も何度か顔を出したことがあります。一つでも必ず参加者が発言するようにしていましたね。
三友 そうです。全員が参加してひと言話す。最初は自己紹介だけでもいいんですよ。
滝川 乳搾りや機械の運転は得意でも、農家にはしゃべるのが苦手な人は多いですからね。
三友 しゃべる人がいて、みんなが聞くことを重ねてきた。もう一つは、「夫婦で参加」が基本です。交流会を続けていくと、まず男の人が牛の調子や草が上手に採れたとか、ちよつと話をしようになる。子育て中の人がたくさんいましたから、子どもものも含めて話す。そのうち女の人が発言するようになったんですよ(笑)。たくさん感じているものがあつたわけです。夫婦で参加しても意見が違ふんだよね。男はどうしても格好のいい話をするわけところが、「牛の調子が上手くいっている」と言っても、「父さん、それ違ふよね」となる(笑)。



中標津市街地から車で10分ほどのところにある三友牧場。チーズ工房があり、植樹も進めてきた

それを四年計画くらいで開墾しました。だから土地が増え、牛が増えるで五、六年たち、そこで借金をして四十頭搾乳体制をつくって——それで十年くらい経過しました。一斉に入植したから条件が一緒で、無我夢

中ややってきて四十頭の牛が飼えるようになったときに、それまでの借金をどういう形で返していくか、という話が出ますよね。
滝川 当時、借金は四千万五百万くらいあったか。
三友 それがよく普通です。そのときに、「もつと規模拡大して借金を返そう」「このままの規模で返そう」という二つの道があり、九割方の方はさらなる拡大をしていく。日本の高度経済成長そのものでしたから。僕は、四十ヘクタールで四十頭体制ができたので後者を選んだ。
滝川 少数派の道を選択した理由はなんだったんですか。
三友 それははつきりしている。実習しているときに、「根室原野は一ヘクタールで親牛一頭が基本だよ」と言われていたから。

「マイペース酪農」の仲間と
出会うって交流会を重ねる
滝川 立ち止まって自分なりの経営を続けているなかで、八〇年代の終わりころでしょうか、「別海酪農の未来を考える学習会」の人たちとの出会いがあつたわけです。
三友 その学習会は、僕が参加する以前からあつた。彼らは、国主導の「ユアペース」じゃなく、自分たちのペースで酪農をやりたい——それを「マイペース酪農」と考えていたよ。借金を抱え、「今より牛乳の生産や牛の頭数を増やしたい。だけど国のペースにはなりたくない」と勉強しているけれど、知らず知らずのうちに規模拡大・高泌乳路線に進んでいた。たとえば、千葉県から始まった「二本立て給与」という飼料の与え方があるんですよ。
滝川 聞いたことがあります。
三友 その流れのなか、餌を積極的にやって乳量を増やす「チャレンジ・フィーディング」という手法があり、気がつくとも国と同じペースで歩いていた。そのとき、学習会のメンバーと僕との共通の友人に見玉さんのところに行った人がいて、「じゃ、

三友さんや別海の酪農学習会のこと。は当時、農業や行政の関係者には知られていましたが、一般誌で取り上げたのは僕が最初でしょうね。酪農家出身なので身近に感じたこともある。仕事を終え、皆さん夜遅くまで熱心に語り合う姿が印象に残っています。「マイペース酪農交流会」につ

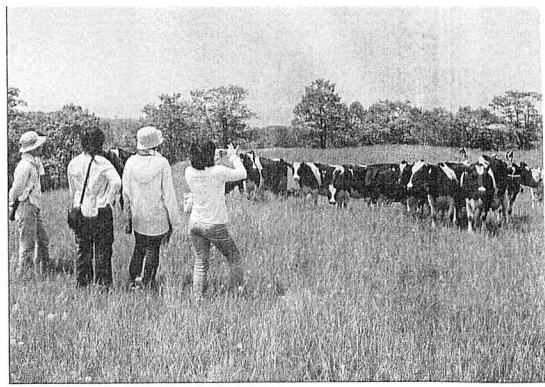
いて少し説明してもらえませんか。
三友 先ほどの経過をたどり(90年代初めに二年連続で学習会で話をしたら、「三友さんの実践をもう少し勉強してみたい」ということになった。農家は仕事を持っているし、通知して集まるのは難しいので、「毎月第三水曜日に集まり、定例の交

三友牧場に行ってみよう」となった。
滝川 そうだったんだ。
三友 みんなでうちに来たので、僕は経営内容を全部出しました。十年分のクミカン(注「農協独自の金融システム」組合員勘定)の略称)を公開し、生活ぶりも見てもらった。それで初めて、「三友さんのほうがマ

「マイペース酪農」とは?

「草・牛・人間の循環」を重視した酪農のあり方。草地面積に応じた適正規模の経営を基本に、牛に無理をかけないために配合飼料の多給による高泌乳を避け、放牧を採用し、糞尿は完熟堆肥などにして草地に還元することで、環境や牛、人間に負荷の少ない酪農を追求してきた。推進主体は「マイペース酪農交流会」で、月例の交流会と年一回の学習会などを行なっている。

【事務局】別海町中西別 177-39 森高哲夫方
Tel. 0153-75-6641 Fax. 0153-75-6423



根室管内での放牧風景。牛たちが牧草を食む姿は訪れる人たちの心を和ませる



筆者が初めて「マイベース酪農」を紹介したときの記事の一部 (本誌 94年3月号)

でしたっけ。

三友 「女のフマン(不満)だね(笑)。男と女では家庭内の意見や考え方が違う。そのことがはつきりして、すごく活気が出てきた。

幅広いテーマで交流を深め 試験研究のあり方にも一石

滝川 二十年近く交流会が続いているのは、すごいことですよ。僕のところにも毎月、「マイベース酪農交流会」の通信がメールで送られてくるので、雰囲気は伝わってきます。最近では道立根釧農業試験場の職員や就農めざして実習中の若者もずいぶ

ん参加していますね。その人たちは何が魅力でやってくるんですか。

三友 自分たちの日常とは違った価値観や活動に触れてみたい、という面白さでしょうね。試験場の研究員であれば、専門はあるけれどトータルとしての研究が欠けているので、現場の農家と自分の仕事とのバランスの問題に興味があるようです。逆に我々からすると、「こうやっているけれど、それは科学的にどうなのか?」という意味で、試験場の人が参加していることで勉強になる。

滝川 彼らの試験研究のあり方まで変わった事例はあるんですか。

三友 研究対象が変わりますね。たとえば、放牧と採草したときでは草の生長や栄養状態が違うので、もっと視野の広い研究になっていく。滝川 牛の健康との関係などが見えてくるのか。

三友 「間口の広がった研究をしてみよう」と、チャレンジはしているみたいですよ。

滝川 「今月の交流会はあの牧場で」という形で続いていますね。

三友 ずっと、年に十力所くらい、現場でその酪農家の状況などを報告してもらっています。特に夏は月代

資料が膨大すぎてどうやって絞ろうかという面もある。

滝川 ちょっと残念だなあ。

三友 もう一つは、こうした活動をしている人のことは、周辺の農家や組織もみんな知っていますよね。今回(4月)の全体学習会だって農協のFAX通信網を使って酪農家に知らせていますが、多くの人は参加しません。

僕がみんなと出会うって話をしたときには来ましたよ。全道あちこちに講演にも行った。当時は、経営改善で放牧を取り入れたり、増えすぎた牛を減らして適正規模にすることが話題になっていた、それが酪農家一人ひとりの意思でできる時代だった。滝川 今はそうじゃない、と。

三友 結果として、大方の人が規模拡大に走り、年間生産乳量が千トン、二千トンの人が現れた。根室原野では平均が六百五十トンくらいになっています。そうしたなかで、放牧酪農は難しい時代の一つの方向性を示すことができてはいる。でも、これだけ規模拡大をする、(拡大した)彼らには選択権がない。

滝川 後戻りできないし、放牧酪農への転換は難しいでしょうね。

わりですね。

滝川 毎年春には、一堂に会して全体の学習会をやっていますね。

三友 総会みたいな感じで、全道各地から参加してくれれます。午前中は酪農家の発表で、今年は「草資源による酪農」をテーマにして、実践している人の報告を聞き、みんなで議論します(4月26日に開催)。あとは、この地域の素材で作ったものを持ち寄って食事をする。参加者は百人以上になるんですが、午後は全員が発言します。

滝川 最近の通信を読むと、経営のことはもちろん、幅広い話題が登場しています。

三友 出発点は経営改善、そして暮らしぶりや放牧酪農へと進んだ。放牧は草を大事にしますが、それは土と関連がある。土を良くするために堆肥の話が出てきて、「化成肥料なのか堆肥なのか」「堆肥をどう使うか」と、どんどん広がっていく。

すると、原油や穀物が高くなる時代がきて、「草酪農をどう普及していくか」となると、それをやろうとする新規就農者が参加してくる。そのことによって僕たち自身も成長するし、マイベース酪農交流会の構成員

牛乳はあくまで「換金作物」「風土の賜物」ではなかった

滝川 北海道には全国の乳牛の半数、肉用牛の一五%くらいが飼育されていて、「酪農・畜産王国」と言われています。その多くは、輸入穀物をたくさん食べさせる「工場型畜産」によって成り立っている。年間に乳牛一頭あたり三トンの配合飼料を食べさせ、年間乳量は約八千キロと七〇年代の二倍(127頁のグラフを参照)。半面、牛は短命化し、さまざま生産病が発生している。近年は放牧の割合が増えていますが、本格的な放牧は全体の二割にも満たないようです。そうした実態に対して、三友さんの見方を聞かせてください。

三友 北海道は開拓してから百年でして、明治から戦後までずっと入植があつて、彼らの基本は「お米を食べたい」ということなんです。

滝川 「日本人は、稲作悲願民族だ」と言う人もいますね。

三友 「北海道の農業ではお米ができない」と、ある時期に分かった。そこで畑作や酪農になったわけですが、それはお米を食べるための手段でした。もっと言えば、牛乳は換金

もだいふ歳をとってきたので、「若い人たちに伝えていくのは技術だけではないのか。生き方の問題じゃないか」となるわけです。常に新しいテーマがあり、それが時代の要請を含めて社会性を帯びてきた。

時代とともに視野が広がりに 農業応援団へ発信を期待

滝川 四年ほど前の交流会に参加したとき、有機農業に対して否定的なことを言った人がいました。僕は疑問を感じましたが、他の参加者が意見を述べるわけでもなかった。でも、最近の通信には、「有機農業は大事だ」という発言や、青森で無農薬・無肥料のリンゴ栽培を実現した木村秋剛さんのような有機農業の先を行く人の話題も出てきます。ずいぶん見方が変わってきたのは、

三友 農業や農法のあり方をもう一回見直そう、というなかに有機農業がある。リンゴの木村さんや、このあいだ亡くなった福岡正信さんの自然農法を含めて、時代とともに視野が広がっています。

滝川 広がりや深まりが出てきているんだから、農業の応援団になってくれそうな人たちに、もっと発信作物なんだね。草しかできなくて、換金してお米を食べる。だから貨幣に変えることが大事になる。

戦後の酪農は、大規模化して機械が必要になり、その機械は牛乳という貨幣で導入する——と、あくまで換金作物を作る。牛乳を生産・消費してチーズにして、そこで暮らすという生き方は全くない。だから、経済行為として、牛乳の値段に応じて搾る。それを繰り返すうちに、「牛乳をたくさん搾ることが生活を豊かにする」という思い込みが生まれた。

安い穀物が外国から安定的に入り、それを食べさせたら牛乳の量が倍にもなり、収入が増える(笑)。そして、機械化して効率が良くなると、また牛を増やしてしまう——そのシステムにどっぷり漬かってきた。

滝川 それが七〇年代以降に顕著になってきたわけですね。

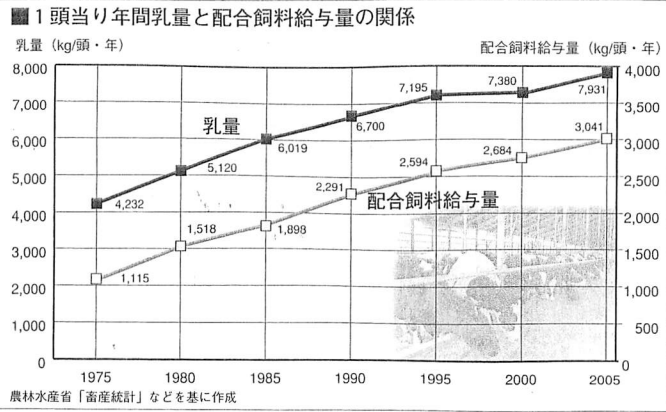
三友 国も多額の補助金を使って支援した。

滝川 地方の行政機関や農協もそうでしたね。

三友 日本人の健康志向のなかで、牛乳は栄養素として優れていて、消費も伸びてきた。生産もそれにうまくマッチした。ただ、一昨年の原油

“農と食”
北の大地から

ところまで行ってしまったのか…。
三友 やはり、既存の酪農家では
引き返せません。三トンの配
合飼料を食べさせるのは、〇・五ヘ
クタールで一頭飼っていることにな
る。すると、五十ヘクタールの土地
で百頭搾乳している人は、「牛を半



分にしろ」という話になってしまっ
それはできない。
穀物依存の酪農を省みない
農業団体の要請運動は疑問

三友 マスコミに訴えたりデモを
する——表現するのはやぶさかでは
ないけれど、よく考えると、「そうし
た行動に走れるのか」という意味で
恥ずかしいことでした。なぜかとい
うと、「大変」の原因は、穀物が高騰
したためではなく、穀物が高騰した
営を営していたからなんです。だから、
「今後、穀物に頼らない経営に切り
換えます。つきましては、多少のタ
イムラグが生じるので、そのことに
ついて支援してもらえないか」とい
う主張なら分かる。

三友 そうした方向性は感じられ
なかったですね。

三友 「穀物をなぜ使っていたの
か？」というのと、安く入ってきて
効率がいいからだった。利益がたく
さん出たときには黙っていたわけ
でしょ、十年間も。自分たちの経営が
実は脆弱な基盤の上に成り立って
いて、工業化した酪農をやっていた
——と白状しているようなものです。

三友 それで恥ずかしい、と。
三友 そのことに農民は気づかず、
いつも行政や政府、消費者に訴えて
きた。大変だから」と対応してくれ
た時代もあったと思いますが…。

三友 でも、北海道の消費者や行
政は農家に対して同情的ですよ。

三友 理解がありません。
三友 それが必要でもないことか
どうかは分かりませんが。

三友 中標津で根室管内の集会所
があってデモをしました。参加者の
半数以上は商工業者なんです。

三友 酪農家がこける」と自分たち
の商売にも響く、というわけだ。

三友 穀物や肥料、運輸…と、酪
農はすそ野の広い産業だからね。

三友 動員というより、商工業者
が切実な問題として参加した、と。

三友 そう。声を掛けられたこと
も含めて、一緒に行動した。

三友 中標津の道路沿いにはそれ
ら業者の店舗がズラリと並んでいま
すものね(笑)。

三友 (商工業者は)自分たちの生
活が困るのであって、生活を防衛
するために酪農を守っていく、と
じゃ、心底酪農を心配しているかと
いうと、「いいときがあったのに、な
ぜだ?」が正直なところでしょね。
だから(生産者側が)自分たちの構
造の脆弱さ、安直さを棚に上げても
のを訴え、「行政などに頼ることが当
たり前だ」という意識を持っている
ことが恥ずかしい、と思う。

三友 ふたたび飼料価格が高騰し
ていくと、同じパターンを繰り返し
ていくかね。

三友 穀物の高騰に対応して乳価
が十円くらい上がった。その時点で
穀物価格が下がってくると、また規
模拡大をするんですよ。現状では
「牛乳が余る」という話になっていま
すが、今年の生産目標は前年比一〇
三%で「余ったらチーズにして規模
拡大をやる」という話です。喉元
すぎればまた増産となります。だか
ら、良くも悪くも残されている道は
規模拡大だけで、「消費者にとって
その牛乳がどんなものか」は、たぶ
ん考えていない。

三友 手許に資料があります。ワ
グ、マイベース酪農家の平均が親牛四十
二頭で、ある根室管内の農協の半数
くらいです。濃厚飼料は、マイベ
ースの人たちが三友さんの倍で年間八
百キロ、農協の平均は二、六トンほ
ど。生産乳量は半分ほどですが、実
際の所得率には倍くらいの開きがあ
ります。本人たちにはその実感は
ないんでしょうが、我々の目から見
るとマイベース酪農の人は儲かって
いる(笑)。でも、そうした道を選ぶ
人がまだ少ないのは、引き返せない

三友 少減らして、今は三十五、
六頭くらい搾っています。

三友 あとはビートバルブ(製糖
工場の副産物を少し食べさせます。

三友 やはり親牛四十頭体制で?

三友 年間ですか! 全道平均
三トンを対し、わずか〇・四トン。

三友 夏は放牧だけだから、配合
飼料はゼロ。冬は少し食べさせて、
一年間で四百キロくらいかな。

三友 三友さん、それは少し食べさせ
て、冬は少し食べさせて、
一年間で四百キロくらいかな。

三友 三友さん、それは少し食べさせ
て、冬は少し食べさせて、
一年間で四百キロくらいかな。

三友 三友さん、それは少し食べさせ
て、冬は少し食べさせて、
一年間で四百キロくらいかな。

三友 三友さん、それは少し食べさせ
て、冬は少し食べさせて、
一年間で四百キロくらいかな。

三友 三友さん、それは少し食べさせ
て、冬は少し食べさせて、
一年間で四百キロくらいかな。

三友 三友さん、それは少し食べさせ
て、冬は少し食べさせて、
一年間で四百キロくらいかな。

三友 三友さん、それは少し食べさせ
て、冬は少し食べさせて、
一年間で四百キロくらいかな。

三友 三友さん、それは少し食べさせ
て、冬は少し食べさせて、
一年間で四百キロくらいかな。

三友 三友さん、それは少し食べさせ
て、冬は少し食べさせて、
一年間で四百キロくらいかな。

三友 三友さん、それは少し食べさせ
て、冬は少し食べさせて、
一年間で四百キロくらいかな。

三友 三友さん、それは少し食べさせ
て、冬は少し食べさせて、
一年間で四百キロくらいかな。

三友 三友さん、それは少し食べさせ
て、冬は少し食べさせて、
一年間で四百キロくらいかな。

三友 三友さん、それは少し食べさせ
て、冬は少し食べさせて、
一年間で四百キロくらいかな。

三友 三友さん、それは少し食べさせ
て、冬は少し食べさせて、
一年間で四百キロくらいかな。

三友 三友さん、それは少し食べさせ
て、冬は少し食べさせて、
一年間で四百キロくらいかな。

三友 三友さん、それは少し食べさせ
て、冬は少し食べさせて、
一年間で四百キロくらいかな。

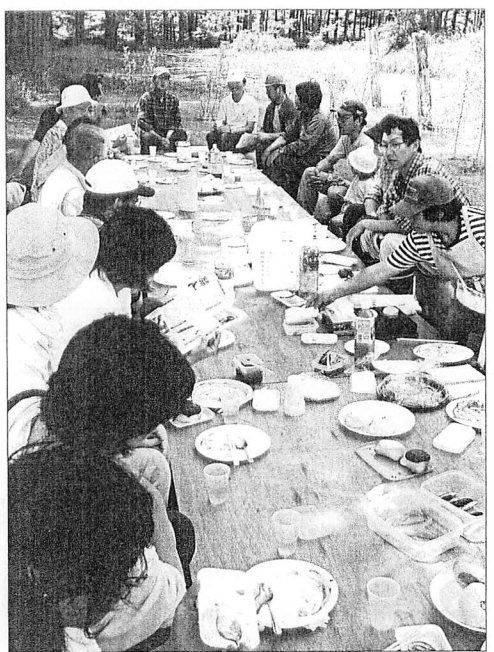
三友 三友さん、それは少し食べさせ
て、冬は少し食べさせて、
一年間で四百キロくらいかな。



毎年春には学習会を開き、全道から100人以上が参加する。体験発表や発言コーナーなどの企画がある(06年4月、別海町内で)

高や穀物高で、貿易は日本一 国の思
い通りにはいかない状況になった。
三友 昨秋、別の取材で訪れたこ
とがある鶴居村の酪農家の近くを
通ったんですが、大きなフリース
トール牛舎に変わっていました。古
い牛舎でいこうか。乳価も上がらな
いし、「以前は言っていたのですけ
どね。そんな現状があちこちにあ
ります。」

三友 そうだね。開拓で入って
今は二代目、三代目だけ。昔はす
ごく苦労したと思うんです。
三友 酪農・畜産をやっている
ところは、土地が良くなかったり、山
がちのところですかね。
三友 「肉体労働から解放された
い」というのが当然あるでしょ。経
営にもある程度、潤いを持たせたい
と。牛は反芻動物で草を食べなければ
ならないことは、よく分かっている
。でも、電話一本で穀物が配送さ
れてタンクに入り、ポタンを押して
食べさせると牛乳がたくさん出る。
三友 牛も穀物は好物だから喜ん
で食べる。



夏場の交流会はメンバーの牧場に手料理を持ち寄って開く(05年6月、別海町の岩崎牧場で)

滝川 穀物を与えたものと三友さんのような飼いやした牛の乳とで

滝川 それはダメですよ。

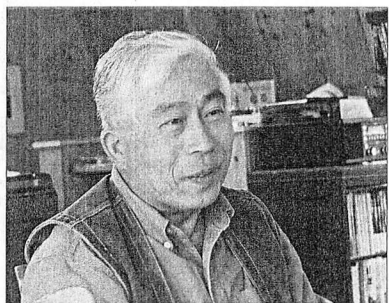
三友 「車に食わせたので穀物が高騰した」では、これまた恥ずかしい話になる。倫理上の問題も含めると、チーズ用と飲用の逆転の是正と同時に、畜産のあり方が問われている。だから、草から牛乳を搾ることは過剰にならない範囲ならば世界的にも許される、と思います。

滝川 それはダメですよ。

三友 「車に食わせたので穀物が高騰した」では、これまた恥ずかしい話になる。倫理上の問題も含めると、チーズ用と飲用の逆転の是正と同時に、畜産のあり方が問われている。だから、草から牛乳を搾ることは過剰にならない範囲ならば世界的にも許される、と思います。

滝川 それはダメですよ。

三友 「車に食わせたので穀物が高騰した」では、これまた恥ずかしい話になる。倫理上の問題も含めると、チーズ用と飲用の逆転の是正と同時に、畜産のあり方が問われている。だから、草から牛乳を搾ることは過剰にならない範囲ならば世界的にも許される、と思います。



滝川 それはダメですよ。

三友 「車に食わせたので穀物が高騰した」では、これまた恥ずかしい話になる。倫理上の問題も含めると、チーズ用と飲用の逆転の是正と同時に、畜産のあり方が問われている。だから、草から牛乳を搾ることは過剰にならない範囲ならば世界的にも許される、と思います。

滝川 それはダメですよ。

三友 「車に食わせたので穀物が高騰した」では、これまた恥ずかしい話になる。倫理上の問題も含めると、チーズ用と飲用の逆転の是正と同時に、畜産のあり方が問われている。だから、草から牛乳を搾ることは過剰にならない範囲ならば世界的にも許される、と思います。

滝川 それはダメですよ。

三友 「車に食わせたので穀物が高騰した」では、これまた恥ずかしい話になる。倫理上の問題も含めると、チーズ用と飲用の逆転の是正と同時に、畜産のあり方が問われている。だから、草から牛乳を搾ることは過剰にならない範囲ならば世界的にも許される、と思います。

滝川 それはダメですよ。

三友 「車に食わせたので穀物が高騰した」では、これまた恥ずかしい話になる。倫理上の問題も含めると、チーズ用と飲用の逆転の是正と同時に、畜産のあり方が問われている。だから、草から牛乳を搾ることは過剰にならない範囲ならば世界的にも許される、と思います。

滝川 それはダメですよ。

三友 「車に食わせたので穀物が高騰した」では、これまた恥ずかしい話になる。倫理上の問題も含めると、チーズ用と飲用の逆転の是正と同時に、畜産のあり方が問われている。だから、草から牛乳を搾ることは過剰にならない範囲ならば世界的にも許される、と思います。

米十魚十野菜を基本にして「飲む」から「食べる牛乳」へ

滝川 穀物多給は環境に負荷を与えるし、食料自給率を下げる大きな要因になる。草食動物の牛の健康にも良くない。では、穀物を多給して生産された牛乳・乳製品・肉を届けることは、消費者にどんな不利益をもたらすのか——という話をしたい。

三友 戦後の学校給食を含めて、牛乳・乳製品は栄養が豊かで、できるだけ摂取しようと努めた。でんぷん質が基本だった日本人に動物性タンパク質を入れ、体位の向上を図るということもあった。消費量が増え、それに伴って生産量も上げていこうとした——ある時期までは、それで良かったと思うんですよ。ところが日本には、一億二千万人に動物性タンパク質を供給する源がない。

滝川 もともと、そうした食文化もなかった。

三友 そうです。そのときに、戦後開拓も含めて草しか採れないところに乳牛を入れてミルクを搾ることは、国土の有効利用としても非常に良かった。ところが、高度経済成長のなかでもっと大量に欲しがり、日

本は草資源では間に合わなくなった。今、日本の牛乳の総消費量は千二百万トンあって、そのうち国内生産は八百五十万トンです。輸入が生乳換算で四百五十万トンになると考えていい。(国内生産の)八百五十万トンの半分は穀物の力によるものです。すると、日本の草資源や工場残さ物から搾れる牛乳は四百五十万トンくらいしかない。今、牛乳として消費されているのは五百五十万トンだから、それでいいという話になってしまっている。その四百五十万トンが日本産の適正な消費量だと思えます。

滝川 そうですね。畜産物の消費量はもともと少なくてもいい。

三友 お米の減反をやめて、化成肥料を少なめで反収八俵くらいにして、しっかりと生産する。それに魚と野菜を加えた食生活があって、若い人やお年寄りの動物性タンパク質を必要とする人は草資源からできた牛乳・乳製品、肉製品を食べる。これが日本の消費を含めてバランスのとれた状態だと思えます。

滝川 肉好きで朝食晩食べてもいい、という人もいますからね(笑)。牛乳も、大人になってもらったさん飲むのは日本人くらいじゃないですか。

滝川 放牧牛乳のほうが優れている、と聞いていますが…。

三友 穀物多給の乳と草で飼養したものとを比べると、ヨーグルトや牛乳では舌に残る味や風味、脂が全く違います。それと、穀物由来の乳では良質のチーズはできません。特に、長期間にわたって熟成させるタイプのチーズには顕著です。

滝川 僕はチーズが苦手なので、どうもピンときませんね(苦笑)。

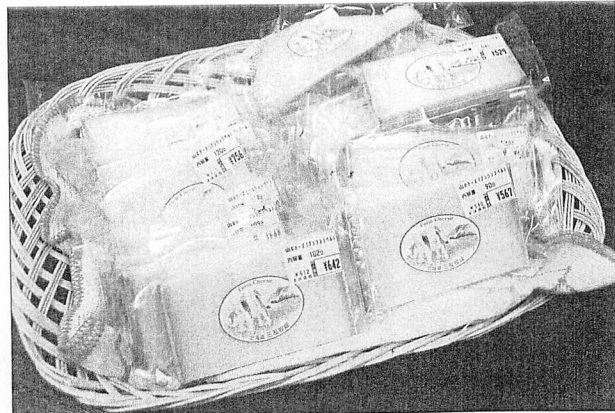
三友 熟成中に脂肪が変質して匂いや味が悪くなるし、穀物やサイレージ(発酵飼料)は良い風味をつくらないんです。草由来の乳で造ったチーズは、熟成によってうま味や風味が増す。ハードタイプのチーズは、その内部に白いアミノ酸の結晶もできてきます。ヨーロッパの伝統的なチーズは、原料乳の中身をきびしく評価して買入れています。乳価も高い。もちろん穀物の給与は制限があるし、多くの場合、サイレージの給与は禁止しています。

これにはいくつかの理由があるのですが、もともと困るのが酪酸菌の存在です。酪酸菌は強い耐熱性がある嫌気性菌で、わずかな菌数でチーズ中の乳酸を利用して酪酸や水素ガ

長い酪酸の歴史があるから、チーズ向けの評価が高く、乳価も一番高い。

滝川 今、日本のチーズ向け乳価はキロ五十円くらいですか？

三友 少し高くなってね。昔は三十五円くらいだった。食生活が落ち着いてきたら、日本自体がチーズ志向になってきた。ところがチーズ向けの牛乳は安いから、乳価全体が下



三友牧場のチーズ工房では、ヨーグルトと各種チーズを製造・販売している
中標津町依橋 1686 TEL & Fax 0153-78-7200
<http://mitomo-cheese.com/>



中標津の酪農家
三友 盛行さん

ルポライター
滝川 康治

利があるんだから、情報開示を求めていくべきだよ。

滝川 残念ながら、そこまで考える消費者はまだ少ないですよ。

三友 「安い」というのが大前提だからね。

「認証で付加価値を」は疑問
「本来の酪農」めざす覚悟を

滝川 今日、『北海道新聞』に「放牧経営に認証制度 酪畜製品にマーク」と言う記事(次頁)があつて、(田)日本草地畜産種子協会が新しく取りくむようです。こうした認証システムをどう評価しますか？

三友 僕はあまり評価しないんだ。酪農はまず、「当たり前」のことをしましよう」という話であつて、「放牧は特殊なことだから、認証制度で付加価値がついていいんじゃないか」というのは思い込みだよ。

滝川 有機農産物の認証制度をめぐっても、有機農家の間で意見の違いがありました。現状では「認証がないと売りにくい」という流通側の都合によって、経費もかかるし不満だけれど有機認証を取得している人もいる。畜産製品の認証も一概にダメとは言えないんじゃないか。

滝川 道立農業試験場などの研究データによると、放牧と舎飼いの牛の乳の成分を比べると、放牧牛の乳の乳質の低下などの生理作用がある。其役リノール酸など機能成分の含有量は放牧牛のほうが多い、という結果が出ている。それも、放牧牛乳が消費者にもたらす利益として伝えるといい。

三友 研究成果を周知していくことは大事だけれど、生産者への不利益はすくあると思う。

滝川 放牧をやっていない人が多いですからね。

三友 「牛は草食動物だから草をやればよい」といっても、共役リノール酸だつて刈つてきた草を食わせてもダメなんだよ。

滝川 たしかに、地面に生えている状態のほうが含有量が多い。

三友 「穀物がダメなら粗飼料」といっても、厳密に言うと粗飼料だつてそうした草じゃないと機能成分の向上にはならない。そこまで情報開示をすればならない。そこまで情報開示をすれば、「じゃ、どうしたらいいか」という話になる。そのあたりの整理をしないといけない。ただ、消費者は知る権利があるんだから、情報開示を求めていくべきだよ。

滝川 それは違って、生産地は日本だけれど、牛乳の源になる飼料の多くは外国産。CMを通じて誤った情報を発信することになる。

三友 それを平気で言つてしまふ。トレーサビリティーの一つに牛の耳標があり、「牛肉の安心・安全につながる」と言われていますが、それも違う

よ。生まれた場所や、どこで最後を全うして店頭と並んでいるか分かつて、途中のことは分からない。問題は経過ですよ。原産国を表示しても、日本だつて危険なところがあるし、中国が全部悪いわけじゃない。でも、そこまで言うのと「北海道の酪農は成り立つのか？」という話になる。だから、消費者に対してケースごとの選択権を与

三友 「自分たちは当たり前前の農業をしています」というのは、基本のなさでも、それでは子どもを教育したり、社会生活を送るには大変だから、認証制度については一般よりも高い値段でも価値として認めてほしい——ならいけれど、「自分たちのやつていることは立派なんだから、高くていいんだ」という発想だと違うよ。

僕は四十年前、一ヘクタールで一頭の搾乳牛をずっと飼つてきたけれど、それは自分の牛乳に価値があるからじゃない。乳価が高いとか安いとかは考えたことがなく、ここの風土で、その(乳価に沿つた)収入で暮らすように思った。よそが一头あたり一万キロ搾ろうが、僕には関係ない。そうした農業は長続きしないし、ここでやるべきじゃない、とね。うちの牛乳に「価値がある」と応えてくれたのは乳酸菌だけだ。それでチーズに価値が生まれるわけであつて、最初から「付加価値を高めよう」なんて思ったことはありません。

だから、認証は一つのステップとしてはいいと思いますが、その次にある世界を認識したものであつてほしい。僕は今、農業の分類をしているけれど、有機農業は有機の認証を得た肥料と農



連載第78回——対談編(3)

マイペース酪農の実践を振り返り
「農業と食のあり方」を考える(後編)

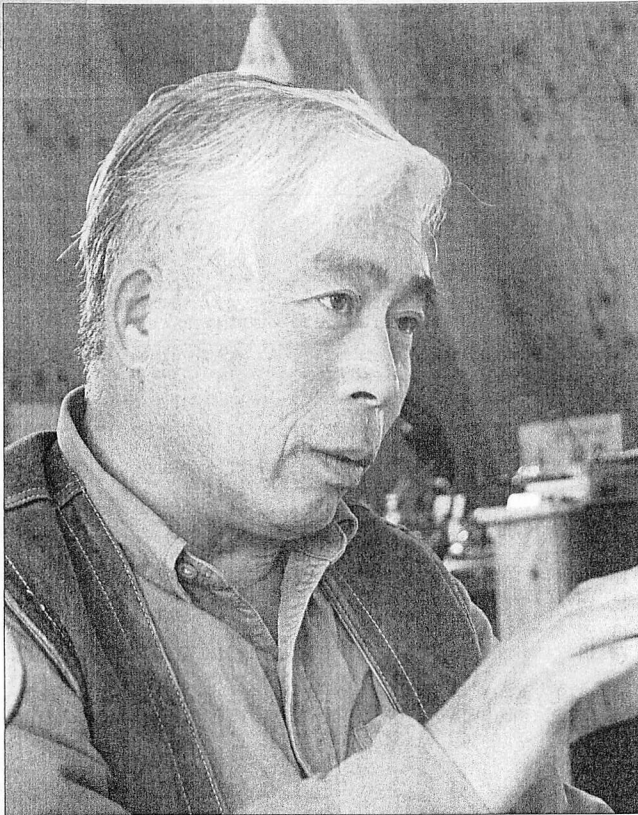
多様な生産者を選ぶ道をつくり 若者に伝えたい草酪農の可能性

牛の飼いや飼料の中心に
消費者が情報選択の道を

三友 消費者の情報の受け取り方ですが、「うちがオーガニックでもいい。穀物を多給して搾った牛乳でも安く買いたい」という人は、それを選択するところが生産者団体はCMで、「牛乳は100%国産です」とやっ

ていくことが、情報開示をしっかりと発信することにつながると思う。

三友 「穀物がダメなら粗飼料」といっても、厳密に言うと粗飼料だつてそうした草じゃないと機能成分の向上にはならない。そこまで情報開示をすれば、「じゃ、どうしたらいいか」という話になる。そのあたりの整理をしないといけない。ただ、消費者は知る権利があるんだから、情報開示を求めていくべきだよ。



三友 盛行(みとも・もりゆき)
1945年、東京都台東区生まれ。都立高校を卒業後、酪農実習などをへて、68年に根室管内中標津町依橋へ開拓入植。「1haに親牛1頭」を基本に一貫して循環型酪農を営む。97年には牧場内にチーズ工房を設立し、妻の由美子さん(45年、東京都生まれ)が切り盛り。60haの土地(うち草地は50ha)で55頭の乳牛(経産牛は35頭)を飼養し、年間生産乳量は約170トン。牧場の目標は「無肥料・不耕起・無殺菌」で1haに1頭の親牛を飼うこと。93年から6年間、中標津町農協組合長。著書に『マイペース酪農』(2000年、農文協)

滝川 殺物は一切やらない。デントコーン(飼料用トウモロコシ)さえ作らない——あれこそ畜産本来のあり方だと思ふ。僕は肉が苦手だから分からないので、パーティーの参加者に話を聞

※TMRは「Total Mixed Rations」の略。各種の穀物や粕類の単味飼料と粗飼料を栄養計算に基づいて組み合わせ、高栄養の混合飼料として給与する方式。この飼料の製造・供給拠点を「TMRセンター」という

■放牧経営に新認証制度 農業団体や種苗会社でくると日本草地畜産種乳協会(東京)は「干干、乳用牛、肉用牛を放牧飼育する牧場」と、その牧場由来の酪農製品に新たな認証制度を設けると発表。飼料自給率の向上など、放牧経営の利点を消費者にアピールし、付加価値を高める狙いだ。牧場は、牛一頭当たり

放牧によって生まれる畜産物に認証制度が登場(4月21日付け『北海道新聞』)

「それが「有機農業は善で価値がある」という認識を持って、もつと広まると思う。ところが「有機農業は善で価値がある」という認識を持って、もつと広まると思う。ところが「有機農業は善で価値がある」という認識を持って、もつと広まると思う。ところが「有機農業は善で価値がある」という認識を持って、もつと広まると思う。

三友 「食」は一人ひとりの健康の問題が基本ですが、今は家計や嗜好が優先されているよね。年代による嗜好の違いはあるけれど、間違いなく少子高齢化していく。そのなかで日本の食生活を考え、それが自給率に反映すべき

滝川 向こうは冬になると野菜なんて食べられないそうなんです。三友 北欧には乳糖不耐症の人は少ないので、出てくるのはミルクとチーズ、干し肉、パンだけ。でも、それがその地に生きるということなんです。

三友 「その手前の段階にあるのが有機農業なんだ」という認識を持って、もつと広まると思う。ところが「有機農業は善で価値がある」という認識を持って、もつと広まると思う。ところが「有機農業は善で価値がある」という認識を持って、もつと広まると思う。

三友 「食」は一人ひとりの健康の問題が基本ですが、今は家計や嗜好が優先されているよね。年代による嗜好の違いはあるけれど、間違いなく少子高齢化していく。そのなかで日本の食生活を考え、それが自給率に反映すべき

滝川 向こうは冬になると野菜なんて食べられないそうなんです。三友 北欧には乳糖不耐症の人は少ないので、出てくるのはミルクとチーズ、干し肉、パンだけ。でも、それがその地に生きるということなんです。

滝川 わが町には三十戸ほどの酪農家が出て、うち二十戸弱で数年前に飼料会社をつくった。大規模酪農地帯と同じようなことをやっている。三友 TMR(※欄外を参照)センターを造るわけですよ。三友 その補助金は生産性を高める

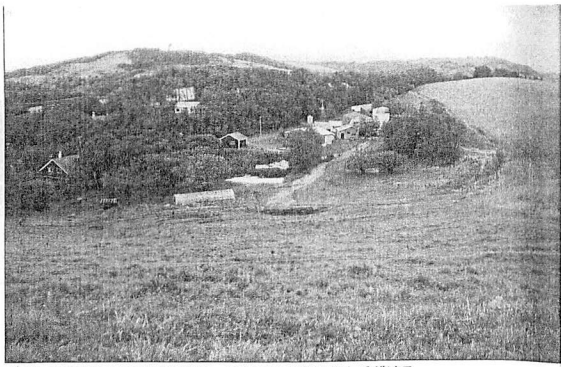
三友 「その手前の段階にあるのが有機農業なんだ」という認識を持って、もつと広まると思う。ところが「有機農業は善で価値がある」という認識を持って、もつと広まると思う。ところが「有機農業は善で価値がある」という認識を持って、もつと広まると思う。

三友 「食」は一人ひとりの健康の問題が基本ですが、今は家計や嗜好が優先されているよね。年代による嗜好の違いはあるけれど、間違いなく少子高齢化していく。そのなかで日本の食生活を考え、それが自給率に反映すべき

滝川 向こうは冬になると野菜なんて食べられないそうなんです。三友 北欧には乳糖不耐症の人は少ないので、出てくるのはミルクとチーズ、干し肉、パンだけ。でも、それがその地に生きるということなんです。

滝川 わが町には三十戸ほどの酪農家が出て、うち二十戸弱で数年前に飼料会社をつくった。大規模酪農地帯と同じようなことをやっている。三友 TMR(※欄外を参照)センターを造るわけですよ。三友 その補助金は生産性を高める

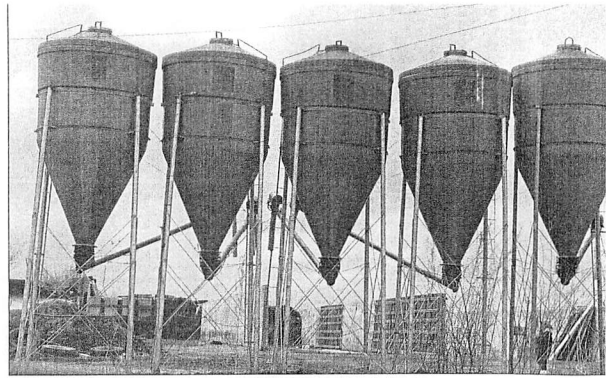
“農と食”
北の大地から



山あいの地域には草地が広がり、平地では有機稲作も手がける
檜山管内せたな町の農村風景

滝川 ただ、三友さんを含めてマイペース酪農の人たちはよく、「この地域は草しかない」と言うでしょ。どうも僕は抵抗を感じるんです。経営的にも、地域の風土からいっても、草が主体であることは間違いないけれど、中標津では昔からジャガイモがあるし、近年はブロッコリーやソバ、大根を作っている人もいます。そのあたりを含めて草主体の酪農を主張されたほうがいい。

三友 うちの基本は酪農なんだけど、苗木の取りまともしています。最近



酪農地帯に立つ配合飼料のタンク群。アメリカ産の穀物を中心に、全道平均で年間1頭あたり3トンの飼料を食べさせる

ためのものですね。僕はチーズの関係で家内に付いて外国に行くけれど、イタリアもフランスも平野部には大穀倉地帯があり、そこは「国際競争に負けないような効率のいい小麦を作れ！」とやっている。でも、山岳地帯で営んでいる酪農と、そうした大平野とは乳価が違う。

滝川 EUでは、いろんな形の直接支払い制度が充実していますね。

三友 山岳地帯で制限があるところの酪農家が、どうしたら存続できるかが大事なのさ。だから、「昔のやり方

良質のチーズ原料乳をつくってくれ」と、フランスでは、できたチーズはAOCという地域特産の認証制度で対応している。「一ヘクターで二頭以上飼つてはいけない」とか配合飼料や発酵飼料の制限などをクリアしたら、一番高い乳価で買います」という話です。そうすると、今の規模で暮らしていける。これが大事です。

地域で暮らしている形態と、それを守るための経済支援や所得補償を地域ごとにやるべきだよ。その分け方は議論をしていくといい。指定団体のホクレンは「プール乳価」(※欄外を参照)を導入してきましたが、それには全道の酪農家をすくい上げる、という効果はあった。

滝川 これまではそうでした。

三友 でも、今はその負の側面が出ている。チーズ用乳価は半額になるから、プール乳価全体が下がる。すると、小さい人はやめるか、拡大するかしなくなる。選択権を奪ってしまった。だから、生産者だけでなく、道民や国民が地域ごとに特色ある生活と生産手段を持たない限り、魅力がなくなってしまう。乳価だけでいけば、「ニュージラランドのほうがコストが低いから、北海道の牛乳はいらないよ」となってしまう。

しまう。

だから、下川で補助金を使うなら、そこで五町、十町でも暮らしていける方法を考える。その支援として所得補償をする。(中山間地の)下川で混合飼料を食べさせた牛乳を搾ってなんの魅力があるのか。三億円の金をくれるのなら、それで機械を買わなくても暮らしていけるような農業政策をやったほうがいい。

滝川 「面倒なことを考えなくていいから楽だ」という農家もいる。

三友 でも、世の中では言うよね、「個性が大事」だって(笑)。

滝川 酪農家と話しても、「今年は乳量の割り当てが何トンだ」とか「牛乳をもっと搾れるんだ」といった話ばかりしていますよ。

多様な新規就農者がいる
道南の旧瀬棚町が面白い

滝川 北海道には、希望を感じさせる地域や取りくみもあります。「平板で」という話だけではなく、夢のある話もお聞きしたい。

三友 道南には二十年来、旧瀬棚町や北松山町(現せたな町)、八雲町に

行っているんですよ。なかでも、旧瀬棚町は面白い。

滝川 あそこは新規就農の人が多い町ですね。

三友 なぜかという、海があり、平地には水田があって、ジャガイモをやっているの、丘に畑があって、もう少し奥に行くとも酪農がある。あそこは多様なんですよ。

滝川 僕も何度か訪れ、いろんな農業の形態を目にしました。

三友 人口がどんどん減るから、酪農も小さな規模を許容していくんだよね。ある意味で条件不利地域なんだけれど、山を平らにすることはできないので、その条件に合った展開をしていくという姿勢がある。僕の知り合いで卵をやっている人もいますし、十三頭くらいの牛しか搾乳していなかったりとか、それぞれのやり方がある。

滝川 養豚をやっている人もいますね。

三友 みんな、うちの牧場をくぐっていった人たちなんだ。「あんな小さな規模で」という人がいるかもしれないが、よくも悪くも多様な人を受け入れる。そうすると地域が別な価値観で動き出す。ところが、ここ(根室)にと多様さがない。

滝川 でも、留萌北部は天北の一部のようなものです。留萌南部と内陸部は、米もできる。

三友 六月の天気がいいので、しっかりと乾草が仕上がります。天北と留萌は酪農の可能性があるので、負の部分もしっかり認識して、若い人を積極的に入れたらいい。根室のような一億円の資本投下をしなくてもやっていけます。草地酪農の乳価と位置づけ所得補償をして、酪農経営の規模を大きくさせない——国と道と地元行政がそう可能性がある。

根柵の負の部分の踏まえ
道北で独自の牧畜の可能性

滝川 旧瀬棚町以外でも、ここは可能性がある」と思うところは？



は、ブルーベリーやハスカップを何十本単位で買う人が増えてきた。昔はブロッコリーや大根を作るなんて思っていた人はいなくなったけど、それが結構できるんだよね。

滝川 ここは涼しいから、かえって栽培に適している。

三友 それに内地の端境期に入るんだよね。特に関西は暑い時期の大根がダメで、それを狙って組織化して出荷している。「草しかない！」は表現としてちょっと安直だね(笑)。反省しなければいけない。

滝川 旧瀬棚町以外でも、ここは可能性がある」と思うところは？

生産者・スーパー・消費者
が安くて楽な道を選んだ

滝川 十勝や根柵に象徴されるように、北海道の農業は大量に生産して市場や乳業メーカーにドンと送る、というやり方で産地をつくってきました。酪農は別として、結局は産地間競争が起きて価格のたき合いになり、どこかの産地がすたれていく——そうした歴史を繰り返す農業のあり方ではないか、疑問を感じています。また、生産者自身が発信していくことが苦手で、最終ユーザーの消費者のことまで考える余裕もない。そうした現状をどう変

※プール乳価=全道で出荷される各用途(飲用、バター・脱脂粉乳、生クリーム、チーズの4項目)の生乳の品代と補助金の総額を、生乳総生産量で割ってはいじき出した乳価。酪農家の実際の収入は、生乳の用途にかかわらず、平均価格の「プール乳価」によって決まる

北の大地から

三友 「大量生産・大量加工」が悪いというんじゃない。それとともに違った形態があることを示していくことが大事なんです。ただ、「少量生産のミルクもあるよ」と言ったときに、「穀物多給で大量生産の牛乳は悪いのか」という話になってしまふ。大が悪くて小がいい」という話がどうしても出てしまふ。なかなか並立できない。



マイベース酪農の人たちは心豊かな暮らしを大事にしている
(06年春の全体学習会で)

生産過程が違うものがある
と消費者に伝えていきたい

三友 一部の人が三友さんに反発する理由も、そのあたりにあるようにですね。
三友 でも、僕らは「酪農の基本は草だよね」であって、「大が悪い」とは言っていない。それを聞いて、「じゃ俺は基本どおりやっていけないのか」と思う人はいるかもしれないけど、苦笑。農協でいえば、僕らをできるだけ見ないようにして、規模の大きいところを前に出していこうとする。
これから消費者に理解してもらうためには、「大も中も小もあるんだよ」としっかり伝えていくことです。最終的には一つのタンクに入ってしまうけれど、「生産過程が違うものがあるんだよ」とね。いつの日にか個別集乳して消費者にはそれぞれの規模の牛乳を価格を含めて選択してもらおうんだ——そういうメッセージは今から言っておくほうがいい。

三友 「大量生産・大量加工」が悪いというんじゃない。それとともに違った形態があることを示していくことが大事なんです。ただ、「少量生産のミルクもあるよ」と言ったときに、「穀物多給で大量生産の牛乳は悪いのか」という話になってしまふ。大が悪くて小がいい」という話がどうしても出てしまふ。なかなか並立できない。



対談を行なった「農村文化研究所」のスペースには農業関係の本を収集。情報発信に努めてきた

三友 たえば、乳価は二つにしているほうがいい。プール乳価にしている限り、小さい農家はやるか大きくするかしない。ところが、WTO交渉のなかでは、日本政府は黄色や青の政策を「緑の政策」(※欄外を参照)と言っている。

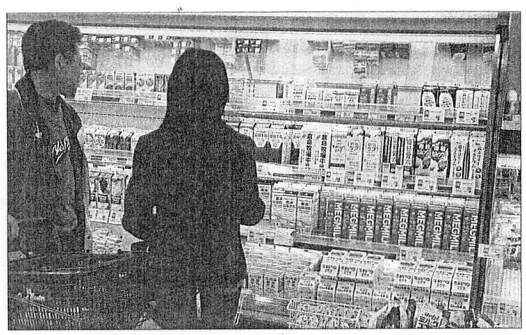
生産を刺激する「緑の政策」と「プール乳価」の見直しを

三友 農水省も道も、ある分野の人たちは「本来的な農業だ。具体化した」と理解を示す。ところが、農水省から道庁、地元行政の三者で話が始まる。大規模酪農を優先する。だから、大も中も小も残っていく道として、勇気を持って区別をしていくことが大事なんです。

三友 風味は違うんじゃないか。
三友 それは多少あるけれど、栄養の違いはない。同じ部類のなかで、お前は背が高く、俺は低い」という程度の話で、分類上はたいしたことじゃないよ。漬物とお米、魚については、日本人は千年も食べているから大したものですよ。新鮮で刺身でできる魚かどうか、誰でも分かってる。米だって、美味しい、まずいはずに分かる。たかだか戦後五十年で、「チーズや牛肉が美味しい」なんて、まだまだですよ。民族全体の文化になっていない。

※緑の政策＝農業政策として国が交付している助成のうち、生産に結びつかない政府の公的資金、生産者に対し価格支持の効果のない直接支払いなどが該当する。WTO交渉では農業補助金などの削減対象から除外されている

えていくといいのか。
三友 先ほど触れましたが、換金作物を作っているわけですよ。それを成り立させているのは基本的に大量生産であって、自分で売ってお金にしていくことにはならない。農協なりメーカーに渡した時点で換金は終わってしまっている。
三友 大きな産地は、技術的な工夫を重ね、農協も努力をしていることは理解できる。でも、ある野菜産地のリーダーが「販売は農協さんに任せています」と話していたように、他者への依存傾向が強い。



三友 (市場などの)販売先が設けた規格に対しては一生懸命つくられるけれど、その規格が消費者にどう届いて評価されるかは別な話なんだよ。大量に農産物を作るシステムのほうが生産農家は楽なわけです。
三友 一 大変なのは売り先を見つけて出荷しなければならぬんですよ。規格に沿ったものを栽培することがレベルアップ」と思わないと仕事ができない。乳質の基準とちよつと似た話ですけどね。
三友 一番大変なのは売り先を見つけて出荷しなければならぬんですよ。規格に沿ったものを栽培することがレベルアップ」と思わないと仕事ができない。乳質の基準とちよつと似た話ですけどね。

めやすく、消費者に売りやすい形で生産者から納めてもらうシステムをつくってきた。三者それぞれが安くて楽な道を選んできたわけで、これがどう変化するか、とすれば難しいよね。
三友 でも、変化の芽はいくつかあって、産直などをずっと続けている人などは一つの力を持っている。
三友 生産者は産直などをやり始めたけれど、数は非常に少ない。特に牛乳は(タンクのなかで)混ざってしまう。
三友 生産量が多いから、牛乳に加工しても売りようがない、と。
三友 この問題は非常に難しいね。当面、今の流れで行くしかない。もう一つは、どんな牛乳からでもチーズを造ってしまふんだから、日本の乳業メーカーの機械化に対する情熱や技術力は世界一だよな。

乳製品の価格差は効率を
追求する限り縮まらない

編集部 僕はチーズ価格の二極化が不思議で、カマンベールだと店頭で百五十グラムが二百九十円のものがあり、その上は一気に八百円とかになる。その中間がない。もう少し価格差が縮まらないものなのか。
三友 それは縮まらないね。つまり、

れを農水省は阻止しないと、せっかくの税金の無駄遣いになる。そう、つくづく思いますね。
三友 道庁農政には農水省より分かってる人が多いんじゃないか。十五年ほど前、マイベース酪農のようなやり方を「一つのモデル的な形態だ」と道の類型のなかに入れましたよね。最近はいちおう、「放牧の推進」をうたっているけど、なかなか進んでいません。酪農の現場では、どう受け止めていますか。



三友牧場で研修を重ね、新規就農をめざす家族とともに。全国からいろんな若者がやってくる

から、農家自身が経営の規模などを区別して選択させる方策を講じたほうがいい、と思う。

生産現場を見学して交流を消費者には自立してほしい

滝川 酪農・畜産の分野は、農産物に比べて生産現場の状況が分りやすく、特殊な用語も多いのですが、ここを消費者にもっと考えてほしいとい



三友さんは植樹にも力を入れてきた。樹木や果樹の苗も取りまとめる

は平均キロ八十円の乳価を六十円にしよう、と「どちらを選択するか」ということで、キロ百円の乳価を選択したいなら牛を減らして一ヘクタール一頭にすればいい——そういう大人の世界がない。国の所得補償政策と乳価との二本立てでやるべきです。

滝川 日本の直接支払い制度は、中山間地などを対象にしたものと、環境保全につながるものに支払うようになっていますが、きわめて不十分な内容です。その点、EU(欧州連合)の施策は進んでいる。たとえば、アニマルウェルフェア(家畜福祉)にきちんと取りくむ農家に対して、成牛一頭あたり五百ユーロ(6〜7万円台)の直接支払いをしていきます。日本はそうした議論がほとんどない。

三友 スイスに行ったとき「この牛舎は(直接支払い)の補助金で建てた」と農家が話していた。その代わり、牛の福祉を考え、飼槽のスペースとか全部決まっています。それを満たしたら補助金をつける。それは選択の問題だから、不平等じゃない。日本は選択に対する自主権を与えないんだね。だから民度が低い。また、農業団体を含めてそれに頼るほうが楽という人が多すぎる。だから、それぞれの地域にふさわ

しいやり方を選択できる条件を提示する」とい。

滝川 どこが主導権をとれば、スミーズに事が進むと思いますか？

三友 農水省ですが、政治家に左右されてしまう。彼らは、大事な問題は必ず政治家の顔を立てる。一家の母さんと同じで、小遣いは持たせるけれど本家の家計は(官僚が)握っている(笑)。中山間とか土地利用型農業という小遣いを渡して、「俺がやったんだ」と。そのとき、農協組織がウンと言わなければいけないから、その多くを構成している大規模志向の農家に厚く配分する。

独自性の乏しい道の農政は財政負担の構造が原因だ

滝川 道の農政はどんな役割を果たせばいいですか？

三友 (道に)独自性は全くない。国の予算が十としたら、半分は道、そのまた半分は町村の負担になる。この構造を変えない限りダメです。

滝川 今の道財政では、独自の財源はないしねえ。

ただし、農業・農村関係の公共事業は、基盤整備をはじめ膨大な数がある。道庁だって関連部署が五つくらいあって、事業には道の負担金がついて回る。

うことは？

三友 大規模酪農と適正規模酪農との違いは何かというところ、「自立しているかどうか」です。前者は他者依存を高めるといふ効率を選び、マイペース酪農のほうは依存をできるだけ少なくして、自分の農場の循環をやって生きていく。消費者も、スーパーやコンビニ、マスコミに依存して、自分がありません。だから消費者に求めたいことは「自立してほしい」ということです。

滝川 この地域では少ないですが、直売所で買い物をするのも自立の一つの方法では。

三友 自立には覚悟が必要なんです。誰が喜んでいるのか、悲しんでいるのか反応しないのでは、生産者も頑張っ作らないし、消費者も期待していない。お互いに自立せず、なれ合っているわけです。自分と家族の健康を維持するために消費者としてやらなければいけないことは、最低限のいいから家庭で調理してみるのだね。ちよっと手間暇かけたら、旬の野菜と魚と米と味噌と醤油くらい買ってくれば暮らしていい。その覚悟ができたなら、あまりスーパーで買うものがなくなる。

まず自立する。選別する目を持つ——そうすれば生産者もスーパーも変わ

そんな従来型の事業からの転換が必要なんです。たとえば、別海町の森高哲夫さんがやっているような、活性水を使った糞尿処理システムといった、等身大の事業に手厚くお金を出すとかね。三友さんもぜひぶん植樹をしています。耕作放棄地のようなところで、森林に戻していくほうがいいところもある。そうした公共事業に金を使うとか。

昨年、このシリーズで標津川の河川整備計画(08年10月号)検証/標津川をめぐる環境・治水・農業を参照を取り上げましたが、あそこは公共牧場の跡地が千ヘクタールも宙に浮いている。その跡地を湿原に戻していくような事業を考えていく時代じゃないか。でも、農水省も道庁もそうした発想にはなりませんね。考えている人はいても、政策として旗を振る人がいない。

三友 そのとおりだね。

滝川 政治家が発言していくと変わっていくますかね。

三友 変わるけれど、政治家は自分の票のことしか考えないからね。予算がないんじゃないかと、予算の使い方が悪いから散らばっているだけで、まとめればお金はある。これは日本の政治風土と民度の問題だね。僕はやはり、一律主義は大きいほうに流されてしま

の？」と言った子もいるからね。

滝川 本当に洗剤を入れて米を洗った子を見た人から、体験談を聞いたことがあります。

編集部 農家側で受け入れたがらない地域もあるようですね。昨日、北見でファームインの話をしていたら、「大規模な畑作だから、毎日何人もこられても面倒だし、邪魔くさい」と受け入れ先が全然ないらしい。

三友 でも、受け入れたら変わる。編集部 その動機づけはどうしたらいいですか。

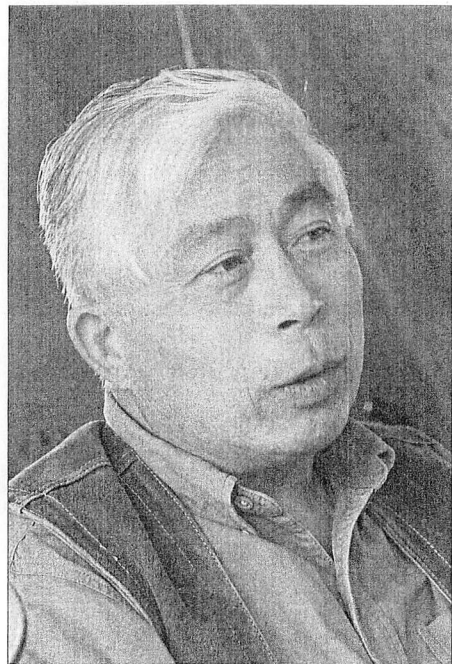
三友 今までは「面倒くさくないことをする」に価値があった。でも、一日農作業が止まってしまうことはチャレンジであって、これからは面倒くさいことに価値があり、それと向き合うのは大事なんだ。

借金処理の新規就農でなく希望に応じて選択する道を

滝川 東京など都会の若い人たちを中心に、農業に対する憧れが高まっているといえます。三友牧場で実習して就農した人も多数いるようですが、農業に関心を持ち、就農をめざす若い人たちに對する期待や助言、周囲に對する提案をお聞きしたい。

北の大地から

一 一般的にいえば現役をバトンタッチしなければならぬ。娘たちはすでに独立している、血のつながった後継者はいません。幸いにして、ここで実習して新規就農したい人が全国にいて、次々にやってきました。入植して四十数年たちますが、僕の経験などをまず実



三友 僕も来年は六十五歳ですから、

三友 それはいいですね。

滝川 「農村文化研究所」の看板が

三友 僕も来年は六十五歳ですから、

**若者の研修農場を創って
酪農の可能性を伝えたい**

滝川 たまには、新規就農したところ

三友 うちにおいて、美深町に入った

三友 ここを研修農場にしたいんで

三友 ここを研修農場にしたいんで

三友 木の状態を含めて植樹なども

滝川 NPO法人のような形をつく

三友 僕たちが現役を退いたりした

滝川 その方向性を打ち出すまで

あと五年くらいはかかるでしょう。

三友さんの四十年間の歩みが、若い人た

ちの血となり肉となることを大いに期

待っています。今日は長時間ありがと

うございました。

(4月21日、三友牧場で収録)

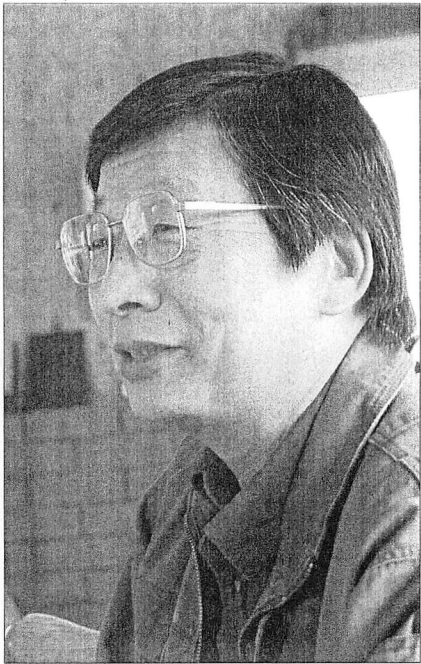
三友 今後、都会の人たちの「農に

三友 それに、都会の大学を卒業し

三友 それに、都会の大学を卒業し

三友 それに、都会の大学を卒業し

三友 それに、都会の大学を卒業し



三友 適齢期を過ぎた子が就農しや

三友 憧れた農業の実現でなく、目

三友 憧れた農業の実現でなく、目

三友 憧れた農業の実現でなく、目

三友 憧れた農業の実現でなく、目

三友 憧れた農業の実現でなく、目

分を創ることが苦手なんだ。日本の教

育が学力偏重でしょ。適性をできるだ

三友 ただ、入れる方法論が確立さ

三友 ただ、入れる方法論が確立さ

三友 ただ、入れる方法論が確立さ